

ミレトスの哲学者たち

だれがタレスを最初の哲学者としたのか

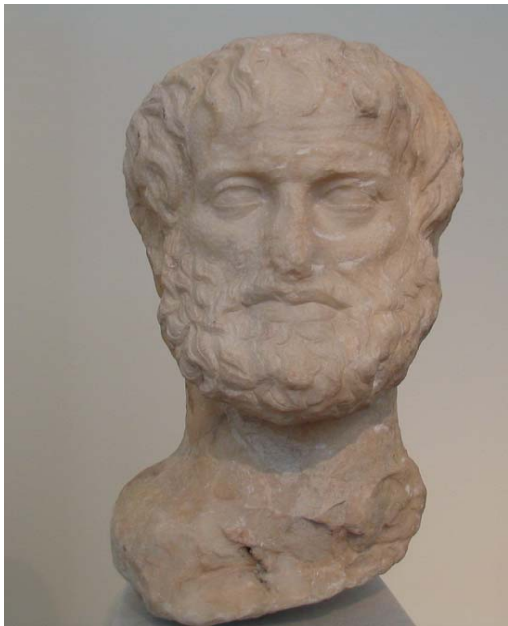
アリストテレス『形而上学』第一巻第一章 980a21-27

すべての人間は生まれつき知ことを求めている。感覚の愛好がその証拠である。じっさい、感覚は必要がなくてもそれ自体のゆえに好まれ、とりわけ目を通しての感覚が好まれる。行為するためだけでなく、何も行為するつもりはなくてもわれわれは、他のほとんどすべてのことに代えて、目を通しての感覚を選ぶのである。その原因は目を通しての感覚が、感覚のなかで一番、知ことをもたらし、さまざまな違いを明らかにしてくれるからである。

Aristoteles 384-322 BC

アリストテレス『形而上学』第一巻第三章 983a24-b25

さて、最初の原因の知識を捉えなければならないことは明らかである。それぞれのものについて、最初の原因を知っていると思うとき、われわれはそのものを知っていると主張するからである。ところで原因は四通りに言われる。そのうちひとつは、存在性あるいは



アリストテレス、Roman copy of 325-300 BC original

そのものの「そもそも何であるか（本質）」を、われわれは原因であると言う。「何ゆえ」という問いは究極的な説明にまでさかのぼり、第一義的な「何ゆえ」が原因であり始源だからである。第二には質料あるいは基にあるもの（基体）が原因と言われ、第三にはそこから動が始まる始源、第四にはこれと正反対に位置するもの、「そのためにであるもの」ないし善が原因と言われる。善は生成と動の終極なのである。これらについてわれわれは自然について論じた中で考察したが、われわれより以前、存在するものについて考察し、真実について哲学した人々からその意見を受け取らなければならない。彼らもまたある種の始源あるいは原因について語っていることは明らかだからである。

彼らの説を概観することは現在の探求にも役立つであろう。あるいは何か別の原因を発見することになるかもしれないし、そうでなければ、いま語ったことをより確信できるであろうから。最初に哲学した人々の大多数は、質料という形での原因のみが万物の始源であると考えた。存在するものすべてがそこから

存在し、(存在そのものとはどまり様態において変化するのみで、) それを第一のものとして生じ、それを最後のものとして滅びるところのものは、構成要素であり、存在するものの根源であると主張し、それゆえに、生ずることも滅びることもないと考えているからであって、そのようなものはつねに存続しているから見なしているからである。ちょうど、ソクラテスが美しくなったとき、あるいは音楽的となったとき、端的に生じたのではないし、これらのあり方を失ったときも端的に滅びたのではないのと同じことである。基にあるもの、すなわちソクラテスその人はとどまっているのだから。これと同じように、他のことも何ひとつとして端的に生じたり滅びたりすることはない。何か一つのもの、あるいは一つより多くのものがなければならぬのであって、このものは、それ自身は存続しつつ、他のものがそこから生ずるところのものである。しかしこのような根源の数と種別については、すべてのひとが同じことを言っているわけではない。このような哲学の創始者タレスは水がそれであると主張した。だからまた大地は水の上に浮かんでいるという見解を表明したのである。彼がそのような見解に至ったのは、おそらく、すべてのものにとって養いとなるものは湿っており、生命の暖かさも水から生じ、水によって生きると考えたからであろう。すべてがそこから生ずるところのものがすべてのものの根源だからである。

Thales		水
Anaximenes	}	空気
Diogenes		
Hippasos	}	火
Heracleitos		
Empedocles		水、空気、火+土

Anaxagoras 同質素 $\alpha\mu\iota\omicron\mu\epsilon\rho\eta\sigma$

動因

Hermodimos	}	理性
Anaxagoras		

Hesiodos

Parmenides

Empedocles

Leucippos

Democritos

Pythagoreioi 質料+形相

Socrates	定義、倫理
Platon	形相、アイデア

Thales f.585 B.C.

Anaximandros f.570 B.C.

Anaximenes f.546 B.C.

Miletos

前 11-12c.アカイア人は異民族の進入によりミレトスに移住した。アカイア人はホメロスを生んだひとびとである。彼らはミレトスで自国の文化を継承し、6,7世紀にイオニア文化を創造する。Thales の時代、このミレトスは通商海運によって最盛期を迎えていた。その支配下の植民都市は 90 以上あり、北は黒海、東はメソポタミア、南はエジプト西は南イタリア諸都市まで支配が及んでいる。

この繁栄を脅かすのがペルシアであった。タレスの時代に近づくにつれ、ミレトスを脅すように鳴り、546 BC. Lydia の首都 Sardis がペルシア王キューロスによって陥落した。ミレトスとリュディアは友好関係にあり、Sardis の陥落はミレトスにとっても、少なからぬ衝撃であったと考えられる。タレスについて伝えられる 585 年という年代も、ペルシアの兄弟国メディアと親ギリシア国家リュディアとの戦争に関連して伝えられている。

Thales タレス

ヘロドトス『歴史』第一巻 74

(メディアとリュディアとの) 戦いは互角に進んで六年目のこと、合戦のさなかに突然昼が夜になるという出来事が起こった。この昼の転換はミレトスの人タレスが、その起こった年まで挙げてイオニアの人々に予言していたことである。

ヘロドトス『歴史』第一巻 170

イオニアが滅ぼされる以前に述べられたミレトスの人タレスの意見も有益なものであった。・・・すなわちそれは、イオニアは単一の中央政府を持ち、それをイオニアの中心テオスに置くべきである。その他のポリスは以前通り存続するも、区と見なされるべきである、というものであった。

ヘロドトス『歴史』第一巻 75

ハリュス川に至ったとき、クロイソスはすでにそこに架けられていた橋によって軍隊を渡したというのはわたしの主張であるが、ギリシア人の間で広く語られているところによれば、ミレトスの人タレスがクロイソスのために軍隊を渡してやったのだと言う。

アリストテレス『デ・アニマ』第一巻 2,405a3-5

彼らは魂について、根源についての様々な見解に準じて、説明を与えた。というのも彼らは、ものを動かす本性をもったものは第一次的なものに属すると考えたからであって、それはいわれのないことではない。

アリストテレス『デ・アニマ』第一巻 5,411a7-

またある人々は魂が万有の中に混在していると主張する。タレスが万有は神々に満ちていると考えたのもおそらくこの理由からであろう。

アリストテレス『デ・アニマ』第一巻 2,405a19

伝えられるところによると、タレスもまた魂をものを動かす性質のものと考えていたようである。彼は石が鉄を動かすという理由で魂を持っていると言っているのだから。

アリストテレス『政治学』第一巻 11,1259a9

伝えられるところでは人々が彼の貧しさを見て、哲学は役立たないと非難したとき、タレスは、天文学の知識からオリーブの豊作を予知し、まだ冬のうちに少しばかりの金を工面して、ミレトスとキオスのすべてのオリーブ油搾器に権利金を支払った。誰も値を釣り上げる者がなかったので、その価格はわずかなものであった。さて、秋がきて、多くの人々が油搾器を求めて殺到したとき、彼は思いのままの金額で貸し出し、巨額の富を集めた。このようにしてかれは、哲学者にとって、富を手に入れることはその気になれば容易である。ただそのようなことに熱心でないだけだということを実証したのである。

Anaximandros アナクシマンドロス

業績

日時計の発見(導入?)及び太陽の夏至冬至、春分秋分の観察。

地図の作成。

天球儀の製作。

ミレトスのアポロニアへの植民団を引率した。

年代、第56回オリンピック祭年の二年目のとき(547/46)、64歳であり、その後ま

もなく死んだ。

fl.= $547/46+(64\cdot 40)=571/70$

著作

『自然について』

『大地の回転について』

『恒星と天球について』

シンプリキオス『アリストテレス自然学註解』24

アナクシマンドロスは、・・・もろもろの存在するものの根源ないし元素を「無限定なるもの」と言った。根源という語を用いたのは彼が最初である。彼の意味するのは、根源は水やその他のいわゆる元素ではなく、何か別の無限定な本性のものであるということである。このものからすべての天とその内にあるコスモス（世界）が生じる。彼が四元素の互いに変化するのを見て、これらの一つを根源とするのをよしとせず、これらとは別のものを根源と考えたことは明らかである。存在するものにとって、そこから生成するそのものへと消滅もまた必然的に行なわれるからである。というのも、それらは時の定めに従って互いに不正の償いをするからであると、彼はいささか詩人的な口ぶりで語っている。

ソロン Fr.24

このわたしが民を集めたその目的を
手にする前に身を引いたことがあったか
時の裁きの場でわが証人となるは
オリンポスにいます神々の偉大な母
色黒き大地。わたしは大地のそこかしこに
定め置かれたしるしを取り払った
彼女はかつて婢であったが、今は自由の女

ピンダロス『オリンピア讃歌』

ひとたびなされた業は
正義に適うも適わざるも
万物の父なる「時」できえ
変えることができぬ

シンプリキオス『アリストテレス自然学註解』24

彼は生成を、永遠の動を通じて反対的なものが分離すると説明した。

プルタルコス Fr.179

彼の主張によれば、永遠なるものから熱いものと冷たいものを生み出す力をもったものが、この世界の生成にあたって分離され、そしてこのものから一種の炎の球のようなものが、大地をとりまく空気の周りに生じた。それは木の周囲に樹皮が生ずるのと同じことである。この球の一部が引き裂かれて幾つかの環の形にまとまった時、太陽、月、星ができた。

Anaximenes アナクシメネス

ディオゲネス・ラエルティオスによれば、アクメーはサルディスが陥落した頃(546年)。死んだのは第63回オリンピア祭年の時(528-525B.C.)

Fr.2

彼は言う。aer であるところのわれわれの psyche がわれわれを統括しているのと同じように、氣息 pneuma と aer が宇宙全体を包んでいる。

ヒッポリュトス『異教徒駁論』1,7

空気の形態については次のようなものである。それがもっとも均等一様である場合には目に見えないが、冷熱湿動によって目に見えるようになる。またそれは常に動いている。

ホメロス『イリアス』 第一七歌 644-

親しい友が討ち取られたということだ。

だが何処にもアカイア軍中、そうした男を見つけれもできない。

全く靄気 aer に、彼ら自身も馬車も一緒に包まれているので。

プルタルコス『冷たさの根源』7,947

何故なら、彼の述べるところでは質料の凝縮し濃密になったものが冷たいものであり、希薄なもの、すなわち弛緩せるものが熱いものであるからである。ここからすれば、人間が熱いものをも冷たいものをも口から吐き出すと言われるのも不当ではない。何故なら、呼吸は唇で押しつけられて濃くされれば冷たくなるが、口を弛めておいて放出されればその希薄さのために熱いものになるのだから。

Hippolytus, Refutatio 1,7

大地は平たく、空気の上に支えられている。同じように太陽や月、その他の天体もすべて火が燃えており、平たいがゆえに空気に支えられている。

シンプリキオス『アリストテレス自然学註解』24

アナクシメネスは、アナクシマンドロスと同じように、基にあるものを一つの無限定なるものであると主張するが、ただしそれはアナクシマンドロスの場合のように無規定なものではなく、規定されたものであって、空気がそれであると言う。彼によれば空気は希薄であるか濃密であるかによってあり方が違う。希薄になれば火となり、濃くなれば風に、そして雲になり、さらに濃くなれば水に、土に、石になり、その他のものはこれらからできている。彼もまた動を永遠であるとし、この動を通じて変化が起こると言う。